三重県立看護大学紀要，14，59～67，2010

〔資　料〕

三重県立看護大学生のボランティア活動に関する調査報告

Investigation report concerning volunteer work by students of Mie Prefectural College of Nursing

奥山　みき子　　中北　裕子　　日比野　直子
山路　由実子　　伊藤　　薫　　伊藤　孝治

Ⅰ．はじめに

ボランティアとは、広義の社会福祉の領域で、自ら進んで報酬を期待せずに時間や労働を提供し、社会的な目的実現に参加することを志す人をいう。このボランティアによって組織的に展開される一連の活動をボランティア活動と呼んでいる[1)]。我が国におけるボランティア活動の歴史は、1946年の終戦直後の混乱期に、食糧・物資不足、戦災孤児・浮浪児（者）の増加などの事態にやむにやまれぬ思いで民間有志が青少年健全育成に取り組んだのが始まりである。1960年代には、それまで草の根的に活動していた人が推進して、大阪ボランティア協会や日本青年奉仕協会などを設立した[2)]。1971年に設立された「いのちの電話」は、素性を明かすことなく相談にのるという公的機関とは異なる役割をもつボランティアによるシステムとして全国的に広まり、このシステムは子ども電話相談「チャイルドライン」にも活かされた。我が国では1995年の阪神・淡路大震災のボランティア活動を契機に、災害が発生した地域でのボランティア活動が注目されるようになった。これを背景に、一部の企業では従業員の自主的な社会貢献活動を支援することを目的に、一定期間連続して休暇を取得する「ボランティア休暇・休職制度」を導入し[2)]、勤労者が自主的にボランティア活動をするための環境整備がなされた。

教育分野においてボランティア活動は主に社会教育領域で取り上げられてきたが、1984～1986年の臨時教育審議会の教育改革以後、教育全般に関わる重要なテーマとして位置づけられた。1992年の文部科学省生涯学習審議会で「今後の社会動向に対応した生涯学習の振興方策について」が答申された。この答申では、ボランティア活動と生涯学習との関係について、1)ボランティア活動そのものが自己開発・自己実現につながる生涯学習である、2)ボランティア活動に必要な知識・技術を習得するための生涯学習であり、学習の成果を生かしてボランティア活動を実践する、3)人々の生涯学習を支援するボランティア活動であるという３つの側面で捉えられた。特にボランティア活動自体を学習として取り上げたことはその後の教育改革の議論に影響を与えた[3)]。

文部科学省は、「地域と学校が連携協力した奉仕活動・体験活動推進事業」により、平成16年度に43都道府県に「協議会」や「支援センター」、1000余の市町村に「協議会」「支援センター」の設置を推進した。また、学校教育においてはボランティア活動を教育課程へ導入することやボランティア活動の実績を入学選抜などで積極的に評価することの推進を図った[3)]。

それに伴い各大学においても、ボランティア活動を正課教育に取り組むことや学生ボランティアセンターを設置するなどの支援が行なわれるようになった。

本学においては、公立大学法人三重県立看護大学中期計画№21212の中に、授業以外での学習機会の提供として、「学生が地域社会への興味や理解を深めることができるよう、公開講座の実施や地域交流センターの活動並びにボランティア活動等に参画する機会を設ける」としている。本研究では本学におけるボランティア活動の支援および促進の方策を検討するための資料を得るために、学生のボランティア活動の実態や意識を明らかにすることを目的に調査を行った。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象：三重県立看護大学に平成21年度在学した395名の学生のうち、本調査を承諾した学生であ

Mikiko OKUYAMA：三重県立看護大学　Yuko NAKAKITA：三重県立看護大学　Naoko HIBINO：三重県立看護大学
Yumiko YAMAJI：三重県立看護大学　Kaoru ITO：三重県立看護大学　Koji ITO：三重県立看護大学

る。

2．調査方法

学年毎に、講義終了時に調査協力を依頼した。調査用紙は学生が自由に取れるように教室に置き、留め置き回収法をとった。調査時期は、平成21年9月から10月であった。

3．調査内容

質問紙は、10～20分間で記入できる質問項目数とし、平成17年独立行政法人日本学生支援機構が行った「学生ボランティア活動に関する調査」を参考に作成した。その内容は、ボランティア活動の経験と活動分野、ボランティア活動の内容と満足度（ボランティア活動のきっかけ・ボランティア活動と大学の専攻や将来の進路・ボランティア活動の満足度）、ボランティア活動への参加と環境（ボランティア活動の動機・情報源・ボランティア活動の阻害要因）、ボランティア活動と大学である。これに、災害ボランティア活動に対する意識や要望を加えた。

4．倫理的配慮

対象となる学生に口頭及び文書で、研究目的および方法、個人情報の保護、自由意志による参加などを具体的に説明し、調査用紙の提出をもって研究協力の承諾とした。なお、本研究は本学倫理審査会で承認を受けた。

Ⅲ．結　果

質問紙は、対象者395名中224名より回収でき、回収率は56.7％、有効回答率は99.6%であった。

1．対象のプロフィール

対象は、1年生が45名（20％）、2年生が58名（25.9％）、3年生が55名（25％）、4年生が65名（29％）の合計223名であった。学生の居住形態は、自宅が54.7％、借家が45.3％であった。性別は、男子が10.8％、女子が89.2％であった。大学のサークル活動については、「積極的に活動またはしたことがある」学生は39.5％、「積極的ではないが活動またはしたことがある」学生は43.9％であり、両者を合わせると83.1％であった。活動または活動したことがある学生が多い中で、「まったく活動していない学生は16.8％であった。これを学年比較すると、「まったく活動していない」の割合が多かったのは１年生で（28.9%）、次が３年生で（23.2%）、２年生と４年生は10%代であった。

2．ボランティア活動の経験と活動分野

1）ボランティア活動の経験

「現在ボランティア活動をしている」学生が、27名（12.1％）で、「以前した事がある」学生が131名（58.7％）で両者をあわせると70.8％に経験があった。学年比較をすると「現在している」割合が多いのは１年生で24.4%、２～４年生は12%以下であった。「まったくした事がない」学生は65名（29.1％）であった。「まったくしたことがない」割合が多いのは、１年生で35.5%次いで２年生34.4%、３年生28.5%及び４年生21.5%と上級生になるほど減少傾向がみられた。

2）ボランティア活動の分野

現在しているまたはやろうと思うボランティア活動の分野を表１に示した。「お年りや障害のある人の手助け」と回答した学生が47.5％と多く、次に「子どもたちにスポーツやレクリエーションを指導する」が43.9％、「自然や環境を守る」が29.6％、「病気の人の手助けをしたり、地域で健康を守る活動をしたりする」が28.3%、「災害救助」が23.8％という順であった。

表１　あなたは現在どのような分野のボランティア活動をしていますか

（行うとすればどのような分野か）

複数回答可　（回答者：223 人）

回　答　項　目	数	%
1．子どもたちにスポーツ、レクリエーションなどの指導をする	98	43.9%
2．お年寄りや障害のある人などを助ける	106	47.5%
3．地域の歴史を掘り起こし、伝統文化やお祭りなどを守り育てる	27	12.1%
4．病気の人を手助けしたり、地域で健康を守る活動をしたりする	63	28.3%
5．国際交流・協力、日本にいる外国人の世話をしたり、外国で援助活動をする	36	16.1%
6．自然や環境を守る	66	29.6%
7．生き生きした地域を作る	37	16.6%
8．自分の知識をいかして、人々の学習を助ける	22	9.9%
9．国内の災害地での救助活動をする	53	23.8%
10．その他	11	4.9%

３，ボランティア活動の内容

１）ボランティア活動のきっかけ

ボランティア活動を始めたきっかけを表２に示した。

「大学のサークル活動などで参加」と回答した学生が55.6％、「自発的な意思で」が48.1％、「友人や知人に勧められて」が25.9％という順であった。

表２　あなたがボランティア活動を始めたきっかけはなんですか。

複数回答可　（回答者：27人）

回　答　項　目	数	%
１．大学のサークルなどで参加する機会があって	15	55.6%
２．自発的な意思で	13	48.1%
３．友人や知人に勧められて	7	25.9%
４．家族や親戚に勧められて	4	14.8%
５．所属する団体の活動などとして	3	11.1%
６．地域からの呼びかけなどに応じて	2	7.4%
７．ボランティアに関する研修会、講習会、催し物などに参加して	1	3.7%
８．ポスター、ちらしなどを見て	1	3.7%
９．インターネットのホームページなどを通じて	1	3.7%
10．福祉施設・学校などの呼びかけに応じて	1	3.7%
11．その他	1	3.7%

２）ボランティア活動の形態及び方法

ボランティアに参加している27人の学生におけるボランティア活動の形態・方法は、「大学部活動」が51.9％、「学内ボランティアグループ活動」が18.5％、「学外ボランティアグループ活動」が22.2％、その他が7.4％を占めた。参加している団体の規模は、50人未満が81.5％、50～100未満が3.7％、100人以上が14.8％であった。27人の学生の内、会費の負担無しが22人（81.5％）、有りが5人（18.5％）であった。負担金額が幾らかの問いに対して,全員が一人月平均すると1000円から2000円未満の間と回答した。

３）ボランティア活動と大学の専攻や将来の進路

ボランティアに参加している27人の回答は、専攻との関連が「ある」が25.9％、「少しある」が40.7％、「ない」が33.3％であった。ボランティア活動は、あなたの今後の進路に影響するかの問いに対して、「大いにある」と答えた者が40.7％、「少しある」が33.3％、「ほとんどない」が14.8％、「わからない」が11.1％であった。

４）ボランティア活動の満足度

ボランティア活動の満足度について、ボランティアに参加している27人の学生のうち、「満足している」が66.7％、「どちらともいえない」が18.5％、「わからない」が18.5％であった。

４．ボランティア活動への参加と環境

１）ボランティア活動の動機

ボランティア活動をする動機を表３に示した。

「困っている人を手助けしたい」と回答した学生が52.9％、「新しい人と出会いたい」が31.8％、「新しく感動できる体験がしたい」が30.0％、「経験や技術を活かしたい」が25.1％、「自分のやりたい事を発見したい」が24.2％という順であった。

表３　ボランティア活動をしたのはどのような気持からですか。（するとすればどんな気持から）

３つ以内を選択　（回答者：223人）

回　答　項　目	数	%
１．困っている人を手助けしたい	118	52.9%
２．新しい人と出会いたいから	71	31.8%
３．自分の経験や技術を活かしたいから	56	25.1%
４．新しく感動できる体験がしたい	67	30.0%
５．自分のやりたい事を発見したい	54	24.2%
６．地域や社会をよくしたい	49	21.9%
７．社会の問題解決に知識・技術・学問を役立てたい	17	7.6%
８．就職などの進路に有利になるから	36	16.1%
９．人とのコミュニケーションや集団での生活に自信がもてないから	17	7.6%
10．不安な気持ちや傷ついた心を癒したいから	4	1.8%
11．自分の生き方に自信がもてないから	7	3.1%
12．社会の不正や矛盾に怒りを感じるから	3	1.3%
13．自分自身を見失っているような喪失感から	3	1.3%

２）ボランティア活動の情報源

ボランティア活動の情報源を表４に示した。「友人から聞く」と回答した学生が45.3％、「インターネット・携帯電話から」が31.8％、「地域の回覧」が

26.9%、「新聞・雑誌」が21.1%、「ボランティア経験者」が20.1%、「イベントに参加」が17.9%、「学内ボランティア相談窓口」が17.5%という順になった。

表4　ボランティア活動を始めた時、どのような方法で情報を得ましたか。（仮にあなたがボランティア活動について詳しくしりたい時にどのような方法で得ますか）

複数回答可　（回答者：223人）

回　答　項　目	数	%
1．友人から聞く	101	45.3%
2．インターネット・携帯電話などの情報網を使う	71	31.8%
3．地域の回覧板や掲示板を読む	60	26.9%
4．ボランティア関係のイベントに参加する	40	17.9%
5．ボランティア経験者に聞く	45	20.1%
6．新聞・雑誌を読む	47	21.1%
7．都道府県、市町村などの広報を読む	38	17.0%
8．テレビを見る、ラジオを聞く	21	9.4%
9．学内のボランティア相談窓口で相談する	39	17.5%
10．家族・親戚に聞く	25	11.2%
11．学外のボランティア相談窓口で相談する	2	0.9%
12．ボランティア情報誌、機関誌を読む	17	7.6%
13．その他	12	5.4%

3）ボランティア活動と学業の両立や阻害要因

ボランティア活動と学業が両立するかの問いに対して「両立する」が56.1%、「両立しない」が6.3%、「わからない」が37.7%であった。

ボランティア活動の阻害要因を表5に示した。活動の障害は、「大学の時間が忙しいから」と回答した学生が56.5%、「活動に必要な知識や技術の不足」が35.0%、「アルバイトが忙しい」が33.2%、「情報が不足している」が27.4%であった。

アルバイトとボランティア活動のどちらを優先するかについて、「どちらかといえばアルバイト優先」が51.8%、「アルバイト優先」が25.4%、「どちらかといえばボランティア優先」が11.2%、「ボランティア優先」が2.2%であった。

表5　あなたがボランティア活動を始めたときに障害になったことはなんですか。（仮に活動するとしたら障害になるだろうと思うこと）

複数回答可　（回答者：223人）

回　答　項　目	数	%
1．大学の時間が忙しい	126	56.5%
2．活動に要する知識・技術を持っていない	78	35.0%
3．情報が不足している	61	27.4%
4．アルバイトが忙しい	74	33.2%
5．活動経費がない	47	21.1%
6．身近に相談できる人やリーダーがいない	25	11.2%
7．人間関係がうまくつくれない	17	7.6%
8．やりたいと思う活動がない	35	15.7%
9．事故にあうなど安全の問題が心配である	7	3.1%
10．先生の理解が得られない	1	0.4%
11．親の理解が得られない	3	1.3%
12．その他	15	6.7%

4）学生のボランティア活動への評価

大学が学生のボランティア活動体験を評価することについて、「評価すべき」が42.2%、「わからない」が49.3%、「評価すべきでない」が8.5%であった。

5）就職活動とボランティア活動

就職の面接で経験を聞かれることを、「知っている」が60.1%、「知らない」が39.9%であった。ボランティア活動を採用の参考にすることに「賛成」が39.5%、「反対」が14.3%、「わからない」が46.1%であった。

5．ボランティア活動と社会や大学

1）ボランティア活動の役割

これからの社会で、様々な問題を解決するにあたって「ボランティア活動の果たす役割が大きくなると思いますか」の問いに対して、「大きくなると思う」が81.6%、「大きくなると思わない」が3.1%、「わからない」が15.2%であった。

2）大学のボランティア活動への支援

(1)　「ボランティア活動について大学教育の場でどのように取り扱うのが適切か」の問いに対する回答を表6に示した。「情報を提供する」と回答した学生が75.3%、「知識や技術の研修会を開催する」が

34.5%、「相談をしやすくする」30.5%、「ボランティアの意義について教える」が17.0%、「ボランティア関連の授業開設」が10.8%であった。

表6　ボランティア活動について大学教育の場でどのように取り扱うのが適切だと思いますか。

複数回答可　（回答者：223人）

回　答　項　目	数	%
1．ボランティア活動の意義などについてオリエンテーションや授業などで教える	38	17.0%
2．ボランティア関連の授業科目を開設する	24	10.8%
3．ボランティア活動の希望者に対して、知識や技術などの研修会を開催する	77	34.5%
4．ボランティア活動の相談をしやすくする。	68	30.5%
5．ボランティア活動の情報を提供する	168	75.3%
6．単位を認定する。	23	10.3%
7．ボランティア活動をする学生を積極的に評価する。	17	7.6%

⑵「大学はボランティア活動の奨励策をとるべきだと思いますか」の問いに対して、「はい」が68人（30.5%）、「わからない」が116人（52.0%）、「いいえ」が39人（17.5%）であった。「はい」と答えた68人に対して、「大学の奨励策で良いと思うこと」についての回答を表7に示した。多い順に「学校行事として参加する」と回答した学生が52.9%、「情報を提供する」が48.5%、「ボランティア関連の科目開設」が17.6%、「活動の場所を提供」が16.2%、「ボランティア講座・セミナーの開催」が16.2%であった。

⑶　学生の特色や長所を生かす方法

学生の特色や長所を生かす方法についての回答を表8に示した。「大学で学んでいる専門性を生かす」と回答した学生が65.9%、「知識や趣味を生かす」が56.1%、「若さや体力を生かす」が24.7%、「友人やグループ活動の仲間関係を生かす」が17.5%、「時間的に余裕があることを生かす」が16.1%であった。

表7　大学が奨励策をとるべきだと答えた方に。大学がとる方法で良いと思うのはなんですか。

3つ以内を選択　（回答者：68人）

回答項目	数	%
1．学校の単位として設定する	8	11.8%
2．ボランティア関連の授業科目を開設する	12	17.6%
3．学校行事として参加する	36	52.9%
4．短期・長期の「ボランティア休暇制度」を導入する	7	10.3%
5．ボランティア講座・セミナーなどを開催する	11	16.2%
6．ボランティアセンターなどの相談窓口を設ける	10	14.7%
7．ボランティア活動を行なう学生に情報提供を行なう	33	48.5%
8．ボランティア活動をする学生を積極的に評価する	8	11.8%
9．ボランティア活動のための資料、機材を提供する。	10	14.7%
10．ボランティア活動のための資金を提供する	5	7.4%
11．ボランティア活動のための場所を提供する	11	16.2%

表8　ボランティア活動を考える場合、学生の特色・長所をいかす方法はどういったものがありますか。

思うもの2つ以内選択　（回答者：223人）

回　答　項　目	数	%
1．大学で学んでいる専門・専攻を生かす。	147	65.9%
2．知識や趣味を生かす	125	56.1%
3．時間的に余裕があることを生かす	36	16.1%
4．若さや体力をいかす	55	24.7%
5．友人やグループ活動の仲間関係をいかす	39	17.5%
6．その他	1	0.4%

⑷　本学の災害ボランティア活動への支援

本学が仮に「学生が災害ボランティア活動をすることを支援するとしたらどう思うか」の問いに対して、「支援するのが良いと思う」が161人（72.2%）、「わからない」が55人（24.7%）、「よくない」が7人（3.1%）であった。

⑸　災害ボランティア活動の支援内容

「本学が支援するとしたら良いと思うもの」の回答を表9に示した。多い順に「ボランティア活動の情報を提供する」と回答した学生が72.7%、「技術や知識

の研修会を開催」が58.4％、「ボランティア活動の相談をしやすくする」が28.0％、「活動する仲間が知り合う場所を提供する」が26.1％であった。

表９　本学が災害ボランティア活動を支援するのが良いと答えた方に。本学が、仮に「学生がボランティア活動をする事」を支援するとしたら良いのはどのようなことですか。

３つ以内を選択　（回答者：161人）

回　答　項　目	数	％
１．ボランティア活動の希望者に対して、知識や技術などの研修会を開催する	94	58.4％
２．ボランティア活動の相談をしやすくする	45	28.0％
３．ボランティア活動の情報を提供する	117	72.7％
４．ボランティア活動する仲間が知り合う場所を提供する	42	26.1％
５．初心者向けにガイドブックを作成する	45	28.0％
６．ボランティア保険などを充実する	19	11.8％

⑹　研修会への参加と研修内容

本学が災害ボランティア活動に関する「知識や技術の研修会を開催した場合参加しますか」の問いに対して、「ぜひ参加したい」が40人（17.9％）、「できれば参加したい」が113人（50.7％）、「参加しない」が20人（9.0％）、「わからない」が50人（22.4％）であった。ぜひ参加したい及びできれば参加したいと答えた153人に対する「開催する研修会の内容で希望するもの」の回答を表10に示した。多い順に「知って役立つ技術」が68.0％、「被災者への接し方」が64.7％、「被災時の心のケア」が62.1％、「災害時に気をつけたい病気」が62.1％、「救急法」が58.2％であった。

Ⅲ．考　察

１）ボランティア活動経験の変化

学生のボランティア活動については平成９年に財団法人学生センターが、全国98大学を母集団として２段階無作為抽出し、10,000人の学生を対象に実施した調査がある。また平成17年に日本学生支援機構が収容定員2,000人以上の大学を都道府県毎に国公私立順に配列して、３校に２校の割合で抽出した211大学学部の2・3年生から選んだ5,000人の学生を対象に行った報告があり、この調査報告と今回の調査結果を比較検討した。

表10　研修会に参加したい・できれば参加したいと答えた方に。本学が「災害ボランティア活動」の希望者にたいして「知識や技術の研修会」を開催した場合に内容で希望するものはどのようなことですか。

複数回答可　（回答者：153人）

回　答　項　目	数	％
１．災害について	50	32.7％
２．ボランティアの心得	48	31.4％
３．ボランティアの安全と健康管理	52	34.0％
４．被災された方々への接し方	99	64.7％
５．災害時に気をつけたい病気や症状	95	62.1％
６．災害時の心のケア	95	62.1％
７．災害が高齢者に及ぼす影響	44	28.8％
８．知って役立つ技術	104	68.0％
９．救急法（ＡＥＤ）	89	58.2％

平成17年の調査では[4]、「ボランティア活動」をしたことがあるかの問いに対して、「現在している」が18.1％で今回の結果12.1％より多かった。また平成17年の結果を平成9年度と比較すると10.9ポイント増加していた。また、「現在はしていないが以前したことがある」の回答で平成17年が33.5％で、平成9年と比較すると13.6ポイント増加していた。今回の結果で「現在していないが以前したことがある」の回答は58.7％で、これを学年別に比較すると、1年生が40％、2年生が56.8％、3年生が58.9％、４年生が72.3％あり、上級生になると増加していた。１年生は、いつ、どのような機会に活動したかは明らかでないが大学入学前に約半数が体験していた。このボランティア活動経験増加の背景には、平成8年の中央教育審議会答申「21世紀を展望したわが国の教育の在り方について（第一次答申）」がある。この答申により、道徳性を育成する総合的な学習時間にボランティア活動の体験的学習を導入する等して、ボランティア活動などの体験活動が小・中学校及び高等学校の教育課程に導入されたことが考えられる[6]。

２）ボランティア活動の分野

ボランティア活動の分野について、平成17年の報告は「子どものスポーツやレクリエーションなどの指

導」が39.8％、「自然や環境を守る」が37.4％、「お年寄りや障害のある人などを助ける」が28.2％、「国際交流・協力」が20.7％の順に多かった。今回の調査では、「お年寄りや障害のある人などを助ける」が47.5％で一番多く、次いで「子どもたちにスポーツやレクリエーションなどを指導する」が43.9％、次が「自然や環境を守る」が29.6％、「病気の人を手助けしたり、地域で健康を守る活動をしたりする」が28.3％の順であった。現在ボランティア活動をしている学生に対して、「現在行っているボランティア活動はあなたの大学での専攻と関連があるか」の問いに対して、「ある」が25.9％、「少しある」が40.7％、両者で66.6％であり、先行調査の20.8％に比して高かった。また、「学生の特色や長所を生かす方法」について、「大学で学んでいる専門性を生かす」、「知識や趣味を生かす」が67.4％であった。以上のことから本学の学生はサークル活動を通じて、「お年寄りや障害のある人などを助ける」、「病気の人を手助けしたり、地域で健康を守る活動をしたりする」などの分野で活動し、かつ「大学で学んでいる専門・専攻を生かした」ボランティア活動を行っている特徴がみられた。

3）ボランティア活動のきっかけ

ボランティア活動のきっかけについては、先行調査では「自発的な意思で」が55.6％、「大学のサークルなどで参加する」が42.5％であった。今回の調査では「自発的な意思で」の48.1％より、「大学のサークル活動などで参加する」の方が55.6％と多かった。先行調査に比べて本学の学生が「自発的意思で」の参加が低い理由として以下の点が考えられる。ボランティ活動の情報を得る方法のうち「学内のボランティア相談から得る」が17.5％であり、ボランティア活動の情報が少ないので自発的にしたい活動がみつかりにくいことが考えられた。ボランティア活動について大学教育の場で取り扱うのが適切だと思うかの問いに「ボランティア活動の情報を提供する」が75.3％であり、ボランティア活動の情報提供を望んでいることがうかがえた。

4）ボランティア活動の教育的意義

青年期は、感覚、知性、感情全ての領域で急激な成熟がみられると同時に自己を確立し始め、社会的人間としての基礎を完成する時期である。したがって青年期においてボランティア活動に取り組むことは、他者との関わり、社会との関係において自己の存在を考え、社会の形成者としての自覚・資質を養ううえで重要であると言われている。[5)]

今回の調査結果でも、学生がボランティア活動する動機をみると、「困っている人を手助けしたい」、「新しい人と出会いた」、「新しく感動できる体験がしたい」、「経験や技術を生かしたい」、「地域や社会を良くしたい」、「自分のやりたい事を発見したい」などがあった。学生が、地域や社会とのつながりを築こうとする気持ちや自分の生きる意義を考える思いがうかがえ、学生にとってボランティア活動は青年期の人格形成に重要な意義をもっているといえる。

5）大学におけるボランティア活動の支援

独立行政法人日本学生支援機構の「大学などにおけるボランティア情報の収集・提供の体制等に関する調査報告」によれば、2004年の調査時点で、「学内においてボランティア情報の提供・ボランティア活動の相談などの部署」は国公立の73.7％、私立の84.6％に設けられていた。また、ボランティア活動推進のための「専任のスタッフを有する部署がある」のは、国公立で0.65％、私立で2.8％であった[6)]。大学によるボランティア支援の内容は、「ボランティア情報の収集・提供」が77.8％であった。これはボランティアコーディネートの最も基礎的な業務であり、また消極的なボランティアコーディネートともいえる。積極的なボランティアコーディネートは、「ボランティア希望者と受け入れ先との需給調整」が31.4％、「ボランティア活動の企画・実施」が12.6％、「ボランティア講座・セミナー等の企画・運営」が6.8％であった。[6)]

今回の調査結果で、大学が「学生がボランティア活動すること」を支援することを良いと考える学生が7割を超えていることから大学に対するボランティア活動に関する要望は高いと考えられた。大学の支援内容としては、情報の提供、知識や技術の研修会の開催、相談の窓口などをあげている。今回の調査で、ボランティア活動の阻害要因に「大学の時間が忙しい」、「アルバイトが忙しい」があり、また、アルバイトとボランティアのどちらを優先するかの問いに対して、「アルバイト優先」と「どちらかといえばアルバイト優先」をあわせると77.2％であったこと、それと大学の奨励策として、「学校行事として参加する」が

52.9％と多い事を考慮すると本学学生のボランティア活動に対する態度は自発的、積極的とはいえない。本学がボランティア活動を推進する場合には、大学の行事や自治会活動など、大学と学生が一体となって行うことを考える必要がある。

６）大学生の災害ボランティア活動

今回の調査で、本学が仮に「学生が災害ボランティア活動すること」を支援するとしたらどう思うかの問いに対して、「支援するのが良いと思う」が72.2％、「わからない」が24.7％、「よくない」が3.1％であった。本学が災害ボランティア活動の希望者に対して「知識や技術の研修会」を開催した場合、「できれば参加したい」が50.4％、「ぜひ参加したい」が17.9％であった。

高校生および大学生の災害ボランティア活動としては、平成7年の阪神淡路大震災、平成16年の愛媛県新居浜市の局地的豪雨による水害、平成19年の新潟県中越沖地震での活動、平成19年の熊本県美里町豪雨災害などでの活動が報告されている。静岡大学は[7)]、学生の災害ボランティア育成の必要性を強く打ち出し、学生を含めたパネルディスカッションを開催した。それから近隣地区自治・地元自治会や災害コーディネータが連携した＜防災ボランティア＞ネットワークが中心となって地元住民と合同の災害ボランティアセンターを立ち上げて、避難所体験などの防災訓練、学生対象の防災訓練を行った。その後大学防災・ボランティアセンターを設置した。また、全学共通の総合科目「地震防災」科目を開講した。他方看護系大学では、「災害看護」が教科としてある場合でも、災害看護の知識を学生ボランティアとして生かすには、ボランティアとしての心構えや平常時の予防活動や防災訓練への参加や防災意識の啓発が必要であると言われている。愛知県下看護系７大学では看護学生として災害ボランティア活動ができるよう平成18年度からネットワークを形成した。その一環として「災害ボランティア代表学生の交流会」を開催した[8)]。この他には、独立行政法人日本学生支援機構は、「災害ボランティア体験型セミナー」を平成18年に実施したと報告している。学生の自主的な組織としては、首都圏の大学生で構成する「災害救援ボランティア組織」があり、ＡＥＤの操作法やロープワーク、地震の仕組みなど災害時に必要な知識や技術の体験ができる研修などを行っている。

東海・南海・東南海連動型地震の発生が想定される三重県において、県・市町村は各自治会組織等と災害の発生に備え様々な防災対策や防災訓練、防災教育を行っている。本学が地域貢献の立場から、災害に対する学生ボランティア活動を推進するには、今後「災害看護」科目の開講が望まれる。また地域の自治会などの組織と学生ボランティアが一緒に災害に関する研修会や講演会、防災訓練を行うことは地域貢献の１つとなるとともに、学生に対する教育的効果をあげる手段として期待できることが示唆された。

Ⅳ．おわりに

今回の調査結果から、本学が今後学生に対してボランティア活動の支援を行う場合、大学の専攻をいかした下記の方策が望まれる。

１）ボランティア活動に関する情報を提供する。
２）ボランティア活動に関する知識及び技術の研修会を開催する。
３）地域や地元自治会とともに、大学の専門性をいかした災害に関する訓練や講習会などを開催する。
４）大学行事として、学生とともにボランティア活動を行う。

【引用文献】

１）森井利夫：ボランティア，現代のエスプリ，321，5-9，東京，1994.
２）松尾索：ボランティアのシチズンシップについての歴史的検証，ボランティア白書2005，22-30，東京，2005.
３）坂東久美子：教育におけるボランティア活動の推進，ボランティア白書2005，77-83，東京，2005.
４）独立行政法人日本学生支援機構：学生ボランティア活動に関する調査報告書，1-75，東京，2006.
５）坂口順治：青少年とボランティア活動，現代のエスプリ，321，53-65，東京，1994.
６）桜井政成：大学等におけるボランティア活動支援の実態と課題，ボランティア白書2007，68-74，東京，2007.
７）里村幹夫：災害ボランティアコーディネータとの静岡大学での地震防災教育の実践，Fac.of

Science, Shizuoka Univ.
8）舟橋香緒里：災害時における学生ボランティアの導入と育成における一考察―看護系大学の場合―，平成19年度厚生労働科学研究費補助金（地域健康危機管理研究事業）分担研究報告書.

【参考文献】

1）財団法人内外学生センター：学生ボランティア活動に関する調査報告書，1-94，東京，1998.
2）土谷恭平：学生ボランティア活動報告書，熊本大学大学院，2007.
3）青木理奈，他：2004年新居浜市水害における高校生ボランティア活動に関する研究，愛媛大学教育実践総合センター紀要，23，151-164，2005.
4）諏訪晃一，他：学生による災害時のボランティア活動と状況的関心―新潟県中越地震におけるfromHUSの活動から―，ボランティア研究，6，71-94，2005.